



No. 137
 2009. 2. 18

町田の図書館活動を
 すすめる会
 事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
 〒194-0022 FAX 042-722-1243

図書館はタダがいいけど.....



和光大学表現学部教授
 前・和光大学附属梅根記念図書館長 津野海太郎

日本の公立図書館は無料である。あまりにも当り前すぎて、普段はそのことをだれも意識していない。しかし、じつはこれは大変なことなのだ。

いま私たちは売り買いの社会に生きている。ところが、その売り買い社会のまっただなかに、お金がいらない、ただでモノやサービスが利用できる空間がいくつか存在する。その例外的な空間の一つが図書館である。例外的なものである以上、売り買い本位の社会の中では図書館の無料原則はかならずしも安定したものではない。安定しているといいきるには、日本では、タダの図書館の歴史があまりにも短かすぎる。戦後、新しい「図書館法」が制定され、図書館は無料を原則とする、と決ったのが1950年、それからまだ60年もたっていない。

それ以前、1899年に制定された「図書館令」では、「公立図書館ニ於テハ図書閲覧料ヲ徴収スルコトヲ得」とあった。事実、上野の帝国図書館では、発足時の普通閲覧室の利用料が2銭、のちに少しずつ上がって、戦前は7銭だった。いまでいえば100円か200円。それで3冊、本が借りられた。

歴史的にだけではなく、空間的にも、図書館無料原則は「グローバルな原則」といったものにはなっていない。韓国や中国では、戦前の日本同様、図書館を有料にするかしないかは、国なり県なり市なりがそれぞれの事情に応じて決めていい、ということになっている。

イギリスをのぞくヨーロッパの公立図書館の多くもそう。たとえばイタリアでは、本の利用については不明だが、リファレンス・サービスや図書館相互貸出にかかわる費用は「利用者負担ということになっている

らしい。

そんななかで戦後日本の図書館は、アメリカの図書館から無料原則をひきつぎ(押しつけられ)、それを努力して日本の土地に移植してきた。世界の図書館のなかでは、むしろ例外に属するのかもしれない。それぞれの国や地域にそれぞれの理屈や事情がある。どれが正しいと決定的にいうことはできない。さきに私が「この社会の中で図書館の無料原則はかならずしも安定したものではない」といったのは、そういう意味である。情勢しだいではどうなるかわからない、その意味では、なかなか微妙な位置にあるということもできる。

いま日本の公立図書館は有料化にむけて突っ走っている。そう考える理由をここで詳説する余裕はないが、とにかく私はそう感じている。

アメリカ図書館協会の調査によれば、昨年9月のリーマン・ショック以来、アメリカの公共図書館の利用者数が徐々に増えているのだという。図書館がタダだからだ。残念ながら日本ではこの種の調査はおこなわれていない。もしおこなわれたら、おそらく同じような結果がでるだろう。

もともとアメリカでは、『波止場日記』のエリック・ホッファーとかブコウスキーとか、なかばホームレスに近い哲学者や文学者が、放浪の途次、各地の公立図書館で本を読んで自由に勉強していた。もし図書館が有料化されてしまったら、未来のホッファーやブコウスキーたちはどうすればいいのか。大いに困るだろう。私だって困る。この3月で私は大学を退職する。収入が激減した老人の知的生活を図書館以外のなにが支えてくれるのか。

市民とつくる図書館 ～共に成長していけることを願って～

於:1月22日(木)・23日(金) 愛知芸術文化センター愛知県図書館

名古屋にて開かれた上記研究集会に、町田市立図書館および図書館協議会から実践報告をとの話があり、守谷館長と相談の上参加させていただいた。はてさて一体何を話せばいいのやと、内心どぎまぎしつつ名古屋へと赴いたのだが、当地ではとても温かいおもてなしで、また県立図書館と岡崎市図書館(ともにかなり新しい)を見学する機会も得られ、さらにいろいろな方からお話をお伺いすることもでき、とても楽しく充実した2日間を過ごすことができた。以下に簡単に基調講演を中心にご報告したい。

基調講演

「図書館づくりはまちづくり」～図書館のもつ公共性とは～

帝塚山大学大学院法政策研究科 中川 幾郎

中川氏は豊中市ご出身で、現在豊中市図書館協議会の委員長を務められている。副委員長が日本図書館協会の塩見氏というそうそうたる顔ぶれの図書館協議会で、いちはやく「図書館自己評価システム」を作り上げたり、指定管理者制度導入見送りの答申を出したりと、全国の図書館協議会のまさに先頭を走っている。

図書館とは公益性・市民性をもつ公的ミッションであり、直営を堅持すべきだとのゆるぎない信念を随所で感じさせるお話であった。公益性を持つがゆえに自己評価が大切で、そのためにいちはやく内部評価システムを完成させたのだが、あまりにあれもこれもと欲張りすぎてかえって労働強化に繋がらないか、そここのところの見極めと下方修正がポイントとなるとの有益な指摘があった。

公共図書館の責務とは

図書館は単純な資料提供施設(Facility)ではなく、人的機能が最も重要な施設(Institute)であるという。そのためには地域実態に即した図書館でなければならず、その担うところは、地域の研究・開発・教育であるという。特に財政論理や経済性から図書館をうんぬんする傾向があるが、図書館の経済性を総入場者数や貸出密度などから測ろうとするとところに問題がある。リクエストの多い本ばかりを揃えれば、貸出率は高まるかもしれないが、しかしそれではポピュリズムに走ることになりかねず、マイノリティーの否定に繋がる。むしろマイノリ

ティーとその要望をしっかりサポートすることこそが、公共図書館のしなければならない責務だと強調された。

これまで、図書館は余暇社会対応であるという「地方文化行政」の誤った思想が流布しているが、そもそも暇があろうとなかろうと人は生きねばならず、生きていくためには学習し続けなければならない、そうした人々をバックアップするものとして図書館がある。世界人権宣言にも、人は「文化的に生きる権利」を有するとあるが、この文化的に生きるとは「表現する権利」「コミュニケーションする権利」「学び続ける権利」の三つが保障されること。それが保障されてはじめて、豊かな市民生活が実現する。またハード主導の思考から「人ありてしくみ、しくみありてもの」という human → soft → hard ware という人的整備の重要性も説いていた。重要なのは、まず「人づくり」、ついで「しくみづくり」、最後に「施設づくり」というプロセスを導く。残念なことにはほとんどの自治体が、箱ものづくりが文化行政だと勘違いしているといえよう。

本当の市民とは

氏の主張では、文化行政の中核は市民づくりであり、その拠点となるものが図書館である、図書館づくりは「まちづくり」そのものとなるという。これは先のハード主導の逆転であり、同時にいまだ日本には、本当の市民が十分には育っていない現実をも暗に示している。

実はこの市民には、3種類あると話された。

①寝民(そこへ寝に帰ってくるだけの市民、その街になんらの愛着もない)、②居留民(要求だけはするが、責任は負いたくない、文句たれ型。いわゆるクレーマー。

団塊の世代が大量退職で、会社の論理をコミュニティーに持ち込むトラブルが急増しているとの話も)、③理想的な市民(コスト負担とサービス要求のバランスを自ら判断できる。自分の狭い要求だけでなく、マクロ的な視野から物事を判断できる)。これはかなり手痛い指摘で、私も含め、自分自身がどの位置にあるか考えさせられてしまう人も多いのではないだろうか。大切なことは、この③に相当する市民が、お互いに教育しあい影響しあい、多教育っていくこと、そして強い市民力を持つようになることなのだ。エリートや政治家だけに任せない、自治の精神を持つことが必要となる。そのためにも、出会いの場として、また情報交換の場として図書館が大きな力を発揮しうるし、図書館こそがその潜在的な機能を備えている唯一の機関であるといえる。

行財政改革の落とし穴

市民自治を活性化させる拠点としての図書館の重要性を十二分に説いたあと、行政からの「協働」と市民の側からの主体的「協働」との違いや、「公共」が行政の専売特許ではなく「市民的公共」の可能性についてなど話され、最後に、先の行財政改革の落とし穴を幾つかの例を挙げて話された。

NPM(New Public Management)理論は欠陥だらけで、その無批判な信奉には問題があると看做す。①成果主義というが、経済効率では推し量れない部分があることを無視している。②市場原理の導入については、導入してはいけない分野があることを見落としている。特に教育や福祉などでは混乱をきたす原因となっている。③分権化というが、実際に行われているのは、逆の集権化・トップダウンでしかなく、本当に分権化を目指すなら予算と権限と責任の三点セットで地方に委ねるべきである。④顧客満足志向はそもそも不可能で、地域間や世代間で違う。仮に世論がどのようであろうとも、マイノリティーに対しては断固手厚くサービスをするべきである。サッチャーやレーガンの民営化は大きく失敗しているにもかかわらず、それらはあまり日本では知られていないと、イギリスへ旅行した折のエピソードを交えておもしろおかしく話された。

以上拙いまとめで要領を得ないところも多々あると思うが、地方自治の大切さ、それぞれの場で私たち

市民がいかに力をつけ、いかに動いていくべきか、その時に図書館がどのような役割を果たせるか、また果たさねばならないか、片鱗でも読み取っていただければありがたい。

中川氏のお話があまりに楽しく、また時宜を得たものであったので、ぜひとも町田へお呼びして広くお話をお伺いする機会を持ちたいと、館長とも話しあった。もしそれが実現したら、多くの方々にお越しいただき直接お話を聞くことで、不十分は報告の埋め合わせにさせていただきますたいと、虫のいいことを考えている。

(町田市図書館協議会委員長 水越規容子)

授業で出会った学生たち ⑧

山本 宣親



「残念ながら試験は失敗しました。再度来年に挑戦します」

警察官になりたいと言っていたO君から届いた便りにそう記されていた。

足に障害を持つ私に、彼は実に自然にサポートしてくれた。私だけではない、バスの乗降時に示す高齢者への配慮。子どもへのやさしい言葉。その様子には私は、彼がなりたいという警察官は『まちのおまわりさん』なんだ！ と得心する。

警察官と聞くと権力の手先のように思え、高圧的に振舞う悪いイメージを持っていたが、本来の任務は市民生活の安全を守ることである。

しかし、わが国では警察官と市民が親しく話し、以前パリの街中でしばしば目にしたような、横断する市民を暖かくサポートするような警察官の姿を見かけることはない。

近年わが国でも犯罪が増加し、現場の警察官の仕事は大変だろうと思う。多分、市民にやさしく手を差し伸べている余裕はないのかも知れない。それだけにO君のような使命感を持った人材は貴重であると思う。

私の警察官イメージを変えさせてくれたO君。彼の便りに手に、夢が実現することを念じる。

藤沢市総合市民図書館と辻堂市民図書館を見学して

2月1日に藤沢市総合市民図書館と同辻堂図書館を見学する機会に恵まれた。当日は全体を通して平塚禅定先生(全国学校図書館協議会参与、聖徳大学兼任講師)がご案内くださり、総合図書館では主幹の内藤氏から、辻堂市民図書館では館長の河村氏から、日曜午後のお忙しい時間帯に関わらず懇切丁寧なご説明を頂いた。

今回藤沢市の図書館を見学した動機は、町田市立中央図書館を作る際に町田と同規模の藤沢市の図書館活動を参考にしており、町田の図書館を考える上で見学が不可欠ではないかと考えられることと、辻堂図書館の見学は平塚先生より特に研修が行き届いていることなど伺っていたので、その活動の一斑でも実見し公共図書館活動について考えを深めたいと思ったからであった。

藤沢市図書館の歴史を概観

藤沢市の図書館は1948年(昭和23年)に設置された。実に図書館法が制定された1950年以前である。

当初、市民の献本運動(一戸一冊献本運)によって蔵書を充実したという背景があることから、「市民と図書館の距離が近い」のが特徴であったという。

1951年には図書館の外貸し出しを開始し、1969年には自動車図書館「そよかぜ号」(奇しくも町田の自動車図書館と同じ名称)の巡回を開始し、各地域の市民センターへの市民図書室の設置など図書館ネットワークを充実させ、市内全域サービスを目指していたという。

この時期について、図書館学の概説書や図書館史のテキストでは、1963年に『中小都市における公共図書館の運営(中小レポート)』(日本図書館協会)が公表され、それを受けて1965年に日野市では前川恒雄館長のもと自動車図書館ひまわり号1台から公共図書館活動をはじめ、貸出による図書館活動を展開、その優れた図書館活動の実例のもとに1970年に『市民の図書館』(日本図書館協会刊)として1冊にまとめられ、重要課題として①貸出、②児童サービス、③全地域サー



ビス、の3点が示されたとされる。

当時の関係者から話を伺うと、『中小レポート』や『市民の図書館』で表明した公共図書館サービスの理念は、支持されて一気に広まったのではなく、日野や府中、町田の多摩地域の公共図書館の活動によって次第に認められ、各公共図書館に実践として普及していったという。

しかし藤沢市立図書館は、日野市立図書館の活動に先だって館外貸し出しを行い、『市民の図書館』以前に自動車図書館や市民センターを利用した全域サービスを実践しようとしていた点が興味深い。

藤沢市の図書館の現状は、市民図書館4館、市民図書室11館によって図書館ネットワークを全地域に張り巡らせている。全蔵書数は1,195,478冊、登録者総数は175,841人、貸出件数総数は4,144,156冊である。総人口405,705人(2009年1月現在)をもとにすると、人口に対する登録率は43%、市民一人あたりの蔵書数2.9冊、貸出数は10冊となる。

公共図書館としては、貸出が盛んで全国平均を上回る町田市の場合、全蔵書数1,000,348冊、登録者総数は121,405人、貸出件数総数3,777,209冊(以上2007年度)であり、総人口417,415人(2007年4月1日)をもとにすると登録率は24.1%、市民一人あたりの蔵書数2.3冊、一人あたりの貸出数は9冊である。両市は規模の面では似ているが、図書館利用についてみれば藤沢市の方が数値上からも盛んであることが分かる。

職員数は、正職員30名、専門業務員34名、一般業務員138名、臨時職員50名、司書有資格率は正職員44%、非常勤職員54%である。専門業務員、一般業務員、臨時職員は非常勤職員である。その中でも専門業務員はスペシャリストで、町田市立図書館の嘱託員に相当する。

総合市民図書館

場所は、小田急線の湘南台駅より徒歩10分で、湘南台中学校の隣、閑静な住宅街に位置している。市の中心である藤沢駅からは小田急線で10分程度北に位

置するが、相鉄いずみの線、横浜市営地下鉄などの駅につながる交通の要衝でもある。また自動車による来館者用に駐車場の用意も怠らない。蔵書数は519,508冊で市内最大規模を誇り、施設の規模は総床面積4,726㎡(町田市立中央図書館は5,262㎡)、3階建ての独立した建物である。1階はエントランスと総合カウンター、一般向けの図書が配列され、他のエリアと区別された地下1階のフロア全面が「子ども図書館」になっている。

特に注目すべきはこの広いスペースをとった子ども図書館である。地下とは思えない外光を充分に取り入



れた明るい雰囲気、広いカーペット敷きエリアもあり、豊富な蔵書の中から子ども達が自由に本を選び、読むことができる。塗り絵や色鉛筆なども用意し、それを掲示するパネルを設置して、子ども達が親しみやすい空間を創出している(←)。

藤沢市の図書館では、『藤沢図書館スタッフマニュアル』(藤沢市総合市民

図書館編、平成元年12月刊、総228p)を作成しており、利用者サービスに備えている。このマニュアルの内容は、全13章(窓口、成人サービス、児童サービス、市民図書館、機器の操作、AVサービス、会場等の利用、市民図書室、自動車図書館、収書業務、整理業務、各委員会の業務、管理)からなり、例えば窓口の章では、窓口業務、登録、貸出、返却、予約、館内利用、資料の整頓、返却本・新着本の配架、フロアワーク、読書案内、開館準備、閉館、ボランティア、宅配の各項目について作業の説明と共に、そのサービスがどのような意味を持っているのかを説明している。

その最初には、「図書館のすべての仕事の成果が窓口業務に結晶する。図書館に対する市民の信頼・評価は、窓口サービスの質の高さによる。窓口におけるサービスの質の高さ、人間的なあたたかい対応のほか、市民は図書館を評価する尺度を持たない。」と窓口業務の重要性が説かれている。

今日、カウンター業務を委託する図書館が増えてい



るが、このマニュアルにあるように図書館にとって窓口(カウンター)が利用者＝市民との接点として最も重視されるべき場所である。その様な場所であるからこそ、「自らの判断で臨機応変に対応するのが、正職員・専門業務員(町田では嘱託員、非常勤職員に相当)の職責である」とあり、「マニュアルに使われるのではなく、上手にこのマニュアルをつかいこなしたい」と記されている。利用者たる市民の支持を集め、信頼される図書館の秘訣がここにあるといえよう。

辻堂市民図書館

辻堂市民図書館は、辻堂駅から徒歩3分程度の場所にある。周辺は住宅地で、3階建て、総床面積1,652㎡、蔵書数184,429冊のこぢんまりとした地域館である。エントランスは1階で、メインカウンターと逐次刊行物コーナーがあり、2階には閲覧室とホール等があり、地下1階に一般図書コーナーがある。



狭い土地を掘り下げて天井の高い空間を作り出している。その壁面は一面書架になっており、狭いながらも無駄のない配架が行われていた。収蔵庫が極めて小さいため、この書架上段は、比較的利用の少ない図書を配架し、背表紙だけでもみえる「開架の収蔵庫」になっている。閲覧は職員に依頼しなければならないが、出来るだけ館内に資料を収蔵し利用者の要求に応えたいという図書館側の考えが滲み出ている。隣接する茅ヶ崎市民の利用も多いという。

辻堂市民図書館のもう一つの特徴は、きめ細かい研修活動である。正職員4名、専門業務員6名、一般業務

員12名、臨時職員12名の体制であるが、全体研修が年3～4回。有志が参加する自主研修が毎月行われている。

その内容は、技術を身につけるだけではなく公共図書館サービスの基本、藤沢市図書館活動の歴史や公共図書館ならではの地域資料の重要性など、公共図書館とは何か？市民の図書館とは何か？を考えることのできる、利用者たる市民の要求に応えられる公共図書館員を育てようとするものである。

館長河村氏の努力が大きいと思われるが、積極的に参加する職員の姿勢も刮目に値する。小さい図書館ながら、日曜日午後の利用者の多さ、カウンターの活気、市内4館中レファレンス件数がトップの 8,110 件であるなど、図書館は人的サービスであるという原則を大切にしている証が窺われる。

最後に、藤沢市では『市民満足度に関する調査報告書 平成 19 年度』を出しており、これによれば、図書館サービスに対する市民の満足度は、市の施策中で第1位である。また国や他市に先立って図書館条例の中にプライバシー保護条項を組入れたり、収集方針公開など市民参加型図書館の先駆でもある。両館ともまた訪れたくなるような図書館であった。

こうした図書館にも、行革による「コスト削減」の波が押し寄せている。この動きは、藤沢のみならず、日本全国の公共図書館に対して圧力として広がりつつある。不況により税収が減れば、節約せざるを得ないのは当然という考え方である。その結果、人件費削減、業務委託化、資料費削減が行われつつある図書館が目につく。しかし公共図書館は、市民にとって身近な情報の窓口であり、地域文化を未来に継承し、市民の知る権利を保障する社会的な機関である。大量リストラの時代だからこそ、無料で利用できる地域の公共図書館は、社会人が自らのスキルアップや転職のための自学自習の場として益々重要になるのではないだろうか。

自治体直営だからこそできる「市民サービス」としての図書館サービスのあり方を図書館員も利用者たる市民もそして自治体職員も考えて欲しいと改めて感じた。なぜ公共図書館が無料なのか？なぜ存在するのか？考えるべきである。そのために優れた図書館活動を展開する藤沢市の図書館を見学できたことは大変有意義であった。関心がおありの方は是非見てきて欲しい。その藤沢市の図書館を参考にしながら、独自に発展し

てきた町田の図書館もまた「市民サービス」を理解している図書館である。その様な図書館を身近に利用できることは、藤沢でも町田でも市民として幸せなことではないだろうか。この図書館サービスが益々の発展することを願わずにはいられない。（山口 洋）

—— 見学者の一員に加わって ——

山口先生率いる若き図書館司書講習生&修了生の方たち 14 名に混じって、藤沢総合市民図書館を訪ねた。内藤さんという、優秀な職員の説明ガイド付で見学できたことを幸せに思う。内藤さんは、図書館および図書館界にわたっての広い知識と深い見識を持っておられ、全ての質問に対して、「現状はこうだけれども、図書館員としてはこう思う」という、明確な指針を柔軟な考えの下に話され、う～ん、これこそプロだ、という感を抱いた。その中から、心に残ったことを紹介したい。

20 年ほど前、コンピューター導入問題から、全国に先駆けて図書館条例にプライバシー保護条項、収集の公開等を盛り込み、国家統制に与することなく市民参加型で先駆的取り組みを実施、地域資料、CDなども含め、全資料をデータ化して検索システムを構築している。

本の中に人がいて、人の中に本があるという考えの下、館内にいろいろな雰囲気のコナーをばら撒き、子ども→YA→成人へと自然な導線、活気あるスペースから静粛といった空間を構成しておられるとかで、館内は不思議と落ち着いて本と向き合えるムードが漂っていた。

何よりも市民生活に密着した図書館を力説され、市民の満足度 1 位(72 主要事業中)に甘んじることなく、38 位であった重要度をどう向上させるか、これが図書館の生き残れる鍵であるという。重要度の高い医療や子育て関係の資料を揃える等、さまざまな対応を考える。

そんな中で、市民、特に 400 名のボランティアとの協働なくして図書館運営は考えられないとおっしゃり、1 歳半全ての赤ちゃん(約 3800 人)の検診会場でのブックスタート事業について触れられた。ブックスタートに関わるボランティアは、約 90 名が登録、毎回 20 名が会場に出向き職員と一緒に 2、3 冊絵本を読みお気に入りの本を 1 冊プレゼントして、子育て相談窓口を紹介。ボランティアがわが子のために話を聞いてくれるということで保護者からも好評で、乳幼児サービスのスタートとしてその後おひぎの上のおはなし会に繋げるなど、重要な事業として位置づけている。

特筆すべきは、点字図書館が民営化される話が出た時、公設公営だから協力してきたが営利を目的とするところには協力できないという動きをボランティアがしたことである。町田でも、図書館児童サービスに関わるボランティアが増えているが、果たしてわが市立図書館は、その数すら掌握していないのが現状のようである。藤沢図書館のように、意思表示できるボランティアがどれだけいるだろうか？気になるところでもある。(増山)

セリフ考

「人が身分を問うのであって、
書物は身分を問いません」
—韓国ドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」—

石井 一郎

「チャングムの誓い」は、朝鮮王朝時代に実在した人で王様の主治医になったチャングムをモデルにして創作されたドラマである。歴史書で数行しか書かれていない人物だ。

ドラマは、幼いときに両親を失ったチャングムが宮廷女官(料理)になり、幾多の試練を乗り越えて王様の主治医になるサクセスストーリー。全54話。ドラマの見所としては、宮廷料理や師弟関係の話などがあり、特に仕事に役立つ場面やセリフが多い。女性だけでなく男性のファンもいる。ソムリエの田崎真也もドラマのファンで『僕が「チャングム」から教わったこと』(飛鳥新社 2006年)という本を出している。

冒頭のセリフは、第8話に出てくる。チャングムが使いで宮廷の書庫へ立ち寄った場面。預かった手紙を役人に渡し、本を見ていた。役人がチャングムの様子を見て本を貸しましょうかと申し出た際、チャングムが私のような身分が低いものが借りてもいいのかという答えに対しての役人のセリフである。

この場面を見ていて、図書館のことを考えさせられた。図書館は、利用者が必要としている資料を提供(貸出・

閲覧・情報)するのが役割だ。利用者の見た目や身分に関係なく対応しなければならない。

「チャングムの誓い」は名場面や名セリフが多い。最後にドラマで一番気に入ったセリフを紹介したい。知識を頼りに答えをすぐ出す医女見習いのチャングムに対して、指導教官が言ったセリフ。

「医者には聡明でなく、深みのある人間がやるべきだ。深みを持って」

「宮廷女官チャングムの誓い」は、おすすめの韓国ドラマだ。(会員)

「町田の学校図書館を考える会」 - 報告-

1月23日(金)、藤の台小学校・薬師中学校の図書館を見学させていただきました。

藤の台小の指導員は2名、薬師中は1名で長く指導員を続けておられます。

どちらの学校も指導員や学校図書館について理解はあるものの、やはり立場が有償ボランティアということも影響しているのか、先生によって考え方がまちまちで、対応に戸惑うことがあるようでした。

指導員の方々はみなさん、子どもたちにとって良い図書館になるよう工夫と努力を続けておられます。

町田の学校図書館を考える会では、町田市立小中学校図書館の現状を把握するため、これからも順次学校図書館見学を進めていきます。(伴)

図書館に関係した本2冊

親愛なるブリードさま 強制収容された日系二世とアメリカ人図書館司書の物語



ジョアンヌ・オッペンハイム著/今村亮訳/柏書房

第二次世界大戦中、強制収容された日系人の子ども達に本や必要なものを送り続けた実在の図書館司書のお話。当時反米感情の強かったカリフォルニアで日系人を支援することは、並大抵のことではなかったにもかかわらず、彼女は一貫して日系人に対する迫害の非を訴え続けた。勇気ある一人の司書が何人もの子ども達の心の拠り所となったのだ。

図書館ねこデューイ 町を幸せにしたトラねこの物語

ヴィッキー・マイロン著/羽田詩津子訳/早川書房

アイオワの人口1万に満たない小さな町スペンサー、ある冬の寒い朝、そこの公立図書館の返却ボックスに子猫が捨てられていた！館長のヴィッキーは図書館で子猫を飼うことにするのだが、この子猫、なかなかのやんちゃぶり。輪ゴムを食べる、書架のてっぺんに上る・・・、だが次第に町の人々は、子猫に会いに図書館へと足を運ぶようになってくる。(水越)





ひろば

<1月例会報告> 21日(水)
16:00~会報印刷
18:00~20:30 例会
於・中央図書館中集會室

出席/石井 伊藤 片岡 黒田 齋川 島尻 高橋
辻 手嶋 前島 増山 丸岡 桃澤 守谷
<山口洋(印刷手伝い)>

●会報について

・巻頭言/今号は津野海太郎氏が快諾してくださる(お急がし中、一番早く原稿を頂きました。感謝です!)。3月は堺図書館のBM運転手さんに。

・協議会の報告、オンライン検索の現状、レファレンスの問題点、自動車産業の影響を受けた自治体の図書館の様子などを知りたい。

●町田の図書館におけるAV資料について・・・予算枠がせばめられた。日本図書館協会です諾をとっているものだけに限られ、そのリストに載ってないと図書館に入れられないし予約もできない。

●多言語資料について・・・英語以外の外国の本、スペイン語、ハンデル、中国語他少なすぎるのではないか。寄贈本を受け入れるなどして増やして欲しい/厚木・淵野辺の図書館は外国人労働者が多いため多言語の本が充実している。町田はこの分野を念頭に置いていないのではないか/町田では、中国映画をするときに中国語でアナウンスしたことがある/中国語、ハンデル、英語のおはなし会をやっているという企画は?

●図書館評価について・・・町田の図書館は市民にどうけとめられているのだろうか。評価対象事業を定め、全館共通、あるいは館毎の中期計画に対する単年の取り組み評価を行おうというもので、評価プロジェクトチームが作り上げたきめ細かな評価一覧表が協議会に提示された。利用実態を調査して仕

講演会2つ 直接会場へどうぞ!

会場:町田市立中央図書館6F ホール

○広瀬恒子氏講演会「どの本読もうかな?」

—2008年度児童新刊本から—

3月7日(土)13:30~15:30 (資料費300円)

○田井郁久雄氏講演会「図書館を見て歩いて」

—専門家と利用者との目で評価する—

3月14日(土)14:00~17:00 (含意見交流)

主催:町田の図書館活動をすすめる会

●2008年度 第12回 文学館(主催)で楽しむ おとなのためのおはなし会

3月19日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

町田の作家「藪田義雄」の作品から 佐々木
「世界で一番やかましい音」(B・エルキン作) 菊池
「なずな長者」(町田の民話) 市川
「ウリボとつつあん」(イタリアの昔話) 平田
<語り:まちだ語り手の会>直接会場へ! 保育申込

●市制50周年記念市民協働事業

—町田の民話再話セミナー受講生による—

「町田の民話を語る」

3月3日(火)14:00~15:30

町田市文学館2F 大会議室

主催:NPO まちだ語り手の会



事の見直しのきっかけにならないかという期待もあり、今後、評価項目、計画等の見直しを進め実施するという。評価の中身を集約し、もりこんだ「新・町田の図書館」を2010年に発行する予定だそう。会員からは、共通の夢にむかって進む職員の意気込みが感じられる、少し細かすぎるのではないか、指標を作る困難さ、活動を客観的にみると複雑であることを再認識するといった意見が出た。

●昨年11月に起こった厚生労働省次官殺傷問題で、厚生労働省職員名簿等の個人情報閲覧を禁止にしたことについて、閲覧を制限する、しないの各市町村の取り組み情報、市民の知る権利とプライバシー問題について話し合う。

お知らせ★町田市男女平等推進センターでの映画会<場所:市民フォーラムの3F 委員活動室>/3/10(火)10:00~「オール・アバウト・マイ・マザー」(スペイン映画)/4/14(火)13:30~「初恋の来た道」(中国)/5/19(火)13:30~「キルトにつづる愛」(米国)/無料

あとがき 町田にも多くの民話が活字として残されているが、ついこの間迄は、狐や狸に化かされ狼に出会った自然があって、人と人、動物と人との関わりが生活の中で楽しく語られていたようである。周りの環境は大きく変化したが、その世界を活字から立ち上がらせあったこととして語り継いでいけるよう、『語って聞かせる町田の民話』の冊子作りに取り組んでいる。その作業を通して、自然の喪失は人の心の大切な部分をも削り落としていくことに気づかされた。語り手によって命を吹き込まれ、耳から耳へと、町田の民話が人の体を通して生き続けられることを願っている。(M⁴)